

Title	俳人泉石としての三宅石庵
Author(s)	櫻井, 武次郎
Citation	懐徳. 1970, 41, p. 26-42
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90484
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

俳人泉石としての三宅石庵

櫻井武次郎

平野舎翠堂の命名者であり初期講師として、また、懷徳堂學主として名のあつた大坂の町學者萬年三宅石庵正名の前半生については不明な點が多い。彼は、よく知られるように、泉石との俳號を持ち、俳諧もよくした。そこで、俳諧資料をもとにして、彼の傳記の空白部の一つを埋めることが出来れば幸いだと考え、簡単な報告をなそうとするのが本稿である。

石庵は、寛文五年正月十九日、京都三條通に生をうけ、青年期に弟觀瀾と共に江戸に遊學、歸京ののち讃岐に渡り、彼地に數年あつてから大坂に來たつて學を開いたという。

さて、彼の來坂については、西村時彦氏『懷徳堂考』（大正十四年）の「懷徳堂年譜」元祿十三年の項に、「三宅石庵大阪船場尼崎二丁目に教授す」と記すのが、最も行なわれている説であろう。しかし、その典據となすところのもの、

石庵は間もなく讃岐丸龜の木村半十郎（後に寸木と號す）といふものに、禮をもて聘せられて彼の地に至り、邑中の子弟に教授する者四年にして大阪に來れり、其年代確ならざるも、墓誌に住浪華三十餘年とあるを以て、三十三歸京の歳より四年後、石庵歿せし享保十五年より三十餘年前とすれば、石庵三十七八の元祿十三年比

に、帷を大阪に下したるなり。

と、西村氏が本文中に記すごとく、甚だ漠然としたものであった（この引用文で「半十郎」とあるのは「平右衛門」と訂正すべく、「後に、寸木」というのも後出のごとく誤りであろう）。だから、大西一外氏が「三宅石庵に就いて」（『ことひら』昭9・3）で述べられるような考えも出てきたのである。すなわち、大西氏は、『懷徳堂考』の年譜中、元祿十二年（十三年の誤り）より正徳二年までの空白の部分の間は、石庵が讃岐の寸木撰『金毘羅會』（元祿十三年）『花の市』（正徳二年）に序跋を記すところから、讃岐に居たと察せられると言われているのである。大西氏説の非は明らかだが、この説の出できた理由は、畢竟西村氏の典據の弱さにあった。そこで、私は、今、西村・大西兩氏の記すところとは別に、泉石こと石庵の來坂の年次を求めてみよう。

撰集に入る彼の句は末尾にまとめて掲げるが、俳書をひもとくと、『金毘羅會』（元祿十三年九月才曆序）に、「コンヒラ」と肩書した泉石の句が見え、彼はまた「遊_レ子泉_ト石書_ニ于西_ト讀_レ寓_一舎_ニ」として漢文の序も寄せている。『金毘羅會』は、元祿十三年の秋、讃岐の寸木・芳水の兩人が京坂を旅行した折に得た句を中心に編まれた撰集^①で、この年、石庵が金毘羅にあったことはたしかであることになる。ところが、元祿十五年春に出た『聖廟俳諧鏡之間』（魯雞撰）には、「大坂」と肩書した發句、及び堺・大坂の俳人と同座した俳筵の記録二巻が載るのである。されば、石庵は、元祿十三年秋以降、十五年春以前に來坂したことになり、さらに、『金毘羅會』が巻頭冬の部を知友の金毘羅會（十月十日に行なわれる）の句で飾ることから本集の編集が十三年の冬以降と目され、『鏡之間』が十五年二月の奉納俳諧之連歌千句の一巡を中心に編集したものであること（同書序）とあわすなら、石泉の來坂が元祿十四年であったとするのは、ほぼ確實とならう。

石庵を讃岐へ誘ったのは寸木こと木村平右衛門であったが、その理由や兩者のそれまでの關係は、残念ながら明らかではない。前引のごとく、西村氏は、石庵の讃岐移住を三十三歳歸京の直後の元祿十年とされる。その據るところ

も今明らかにならないが、讃岐に四年滞在したということは、

其の比、讃岐の木村某といふ人、其の名を慕ひて來り、勸めて國に伴ひしかば、かしこに客居する事四年、其の後復浪花に來りて住み云々

とある『續近世畸人傳』等の記事に従われたものであらう。四年間讃岐に居たという傳を信するならば、彼が讃岐に渡ったのは元祿十・十一年のころとなるわけである。『金毘羅會』の泉石序は、彼が西讃に住んでいたことを傳えており、同集に「宮嶋の彌山にのぼりて」と前書する句のあることから、かの地に滞在中、安藝へも旅したことを察することができる。

泉石という名に見える俳書を寓目の限りでいうならば、白雪撰『茶草子』（元祿十二年きさらぎ校考）が最も古い。他、管見による彼の在世中の入集は、前記『金毘羅會』『鏡之間』の他は、『追鳥狩』（元祿十四年）・『野がらす』（元祿十五年）・『菊の塵』（寶永四年成か）・『花の市』（正徳二年）・『鏽鏡』（正徳三年）にすぎない。

石庵を金毘羅に誘った木村寸木は、當地の羽屋はねやと稱する酒造家で、木村家の祖は、慶長十八年から正保二年まで金毘羅大權現別當金光院住職だった宥眼ゆるまなの招きで讃岐東海岸の津田から金毘羅に移り來り、代々金光院住職を嗣ぐ山下氏とは深い姻戚關係に結ばれていた名家だったという（以上、松原秀明氏御教示）。その寸木の俳歴は長いはずであった。天和二年四月から十二月まで、いわゆる『白水郎子紀行』の旅を行なった惟中は、九月二十五日に金毘羅に入り、一柳軒寸木の許に宿ったことが、

九月二十五日金比羅に上る。……仁王門の樓門をわたり、石階高く登り、金比羅大權現の前に到。……所所ながめつくしてふもとの松尾町一柳軒寸木子のもとにやどる。老若の好士よりきて一會興行。

たけからん象頭の麓角の鹿

／尾花すぼむる谷のさうさき 寸木子

翌日、法印金光院のもとに案内しなければ、やがてこよなと宣ふ。寸木・汀龜など誘ひて參りぬ。

という記載から分かる。寸木は正徳五年に六十九歳で歿している（墓石銘）ので、天和二年は三十六歳であったことになる。大西一外氏の「讃岐掃苔録」（『讃岐史談』第二巻第二號）によれば、寸木は、高松の一三子に俳諧を學んだという。そして、惟中が自ら『白水郎子紀行』に「従來しりたる虚空庵一三子」と記すごとく、一三子と惟中も古くからの知己であった。何よりも寸木一族の木村氏は、家業の關係で京坂に縁が深く——それは、後年のことになるが、懷徳堂が出資者の一人である木村氏のために、一族が來坂の時の宿舎にあてる部屋を設けていたことからも言えよう。木村氏が懷徳堂に出資したのは、石庵との個人的なつながりだけによるものではあるまい——、當然、寸木は、大坂で惟中と直接會したこともあったはずだと思われるし、石庵を知ったのも、しばしば京へ往來していたからである。だが、疑問はなお盡きない。石庵が寸木に誘われて金毘羅へ赴いたのは、彼が江戸遊學から歸京して間もないころなのであった。假に石庵の人柄に寸木がほれこんだのだとしても、歸京後間もなく、そして未だ無名の石庵に、寸木が、いかにして知己を得たのか。

しかし、私は、その疑問に答えるすべなく、寸木について敍べたのを機に、ここで、讃岐時代から後年にかけて、石庵が風交を結んだ誰彼の俳人について擧げてみることにしたい。——

芳水——『金毘羅會』の旅で、寸木は芳水と共に京坂を遊吟した。芳水は、元祿六年秋にも、實兄紅雪の遺志を繼ぐべく京坂に來り、諸家の句を併録して『佐郎山』を増補刊行した。某年閏八月二十二日付の寸木（推定）宛石庵書簡では、彼が大坂で元氣に勤務していることを報じている。閏八月のある年次をこのころから求めると元祿十五年と寶永七年が候補にあがるが、その何れかと斷定することは難い。もし、この書簡が元祿十五年のものとするれば、芳水も、石庵と同じころに大坂に來たことになる。ともあれ、元祿末か寶永のころに大坂に移住したことは確實である。

なお、芳水の年齢については、『既望』（寶永六年刊）の次の記事が参考にならう。

備中の倉舖にして、あるじに露堂、浪花の芳水、僧あり、山伏あり、共に五十の隨齡なり

名月やこちでも光る白髪づれ

巖朱拙

大内初夫氏の「俳人四方郎朱拙の研究」(『佐賀龍谷學會紀要』第四號)によれば、朱拙はこの年推定五十四歳であるが、その典拠は、『續山彦』(寶永二年刊)の朱拙句前書「あすく五十のよはひにおもむきたり」による。この前書が「先我もおとこの部にて年忘れ」に付くものであることを知れば、この大内氏の推定はまず間違いないものと言えよう。露堂も芳水も、一く四歳の差はあるとしてもほぼ明暦年間の生まれであったと推察できよう。なお、朱拙は、こののち四國に赴き、寸木を訪れ、

歩才・蠅虎の二儒士に父たる寸木子の隠家にて

聞事の庭の訓や早稻晚稻

朱拙

たゞ中過てたゞの夜の月

寸木

に始まる兩吟歌仙を卷いている(花の市)。

舍羅——大坂の舍羅は、元祿十三年春から秋にかけて、山陽から讃岐への行脚を試みており、この夏、金毘羅で泉石と會している。すなわち、『金毘羅會』に「一日舍羅をいざなひて興泉寺の蓮池にあそぶ」と前書して收める「蓮いけやはたに雀の糞ひとつ」の泉石句や「追鳥狩」所收の泉石・寸木・舍羅同座の蓮句がその證とすべきもので、興泉寺には、吐斗・寸木も同行したらしく、『金毘羅會』には四人の蓮の句が並んで掲げられていて、前書は、この四句に對してつけられたものと考えられる。舍羅が金毘羅へ引杖した一つのきっかけとしては、俳歴が古く、大坂の俳人との馴染みもあり、この地の富豪であった寸木をたずねるためでもあったことが考えられよう。因みに、興泉寺は、松原秀明氏の御教示によると、寸木の羽屋のあった新町にあり、のち榎井六條に移った。その移轉の時期は明らかではないが、榎井の某家系圖に「元祿十二年當村興泉寺」とあり、このころ、すでに榎井に移っていたと考える可能性が強いとのことである。

魯雞——石庵の來坂を眞先に告げる『鏡之間』の撰者魯雞は、『野がらす』に「泉州」と肩書して入集しており、『龜島眺望集』(元祿十一年)の撰者として知られる中澤呂圭と同一人物ではないかと思われる。つまり、『住吉物語』(九年刊、青流撰)・『男風流』(十二年刊、天垂撰)・『あさくのみ』(十二年刊、舍羅撰)・『金毘羅會』・『荒小田』(十四年刊、舍羅撰)には「呂圭」が入集し、『鏡之間』・『駒掬』(十五年刊、芙蓉撰)・『野がらす』(十五年刊、萩石撰)には「魯雞」が入り、元祿十五年の『鏡之間』を境としてはっきりと區別され、両者が同一俳書に入集することを知らず、それにもかかわらず、兩者共に才磨・青流・舍羅ら堺・大坂の俳人と交際が深いと察せられるからである。しかも、『鏡之間』には「泉陽隱士魯雞」、『龜島眺望集』には「泉陽界住中澤氏呂圭」とあった。もっとも、それに對して疑いの投ぜられる資料も存する。先に少し引いた、現地に傳らえる某年閏八月二十二日付の讃岐の人(寸木と推定される)へ宛てた三宅石庵書簡であるが、石庵は「呂圭とたづねて舍羅にかたる」と前書して、石庵・舍羅の發句と脇を記し、三人が名月の夜、京に遊んだことを報じている。先述のごとく、この書簡は元祿十五年ともあるいは寶永七年とも考えられるが、何れにしても、『鏡之間』の刊行より後の執筆であることに間違いはなく、十五年年頭ごろに呂圭を魯雞に改めたという考えに支障を來たすことになる。改號後も、古い號をプライベートな書簡などに記すことはありうるが、石庵としては、古い「呂圭」という號には馴染みがうすかつたはずであるし、しかも、書簡中に「舍羅方へふと呂圭と申すにさそはれたづね」という書きぶりから、寸木が呂圭については知己でなかったことも察せられ、ますます私の非は明らかかなように見える。ある人物についてのことを未知の人物に紹介するとき、やはり、當時通用されているものを用いるのが普通だからと思われるためである。しかし、『龜島眺望集』に寄せる青流の跋には「呂圭其名姓中澤號探龍」とあり、つまり呂圭は名であって、俳書へはそれまでその呂圭という名で入集していたと察せられるのである。元祿十五年から呂圭は、その名と音の通じる「魯雞」に改號したと考えれば、石庵が魯雞改號後も寸木(推定)への書簡に本名を報じたのだと解して何の不思議もなくなってくる。やはり私は、魯雞と呂圭は同

一人物だと思いたく、^⑧彼は石庵が來坂して知った初めてのころの一人であった。なお、魯雞（呂圭）の名は、元祿末年から諸俳書に見えなくなり、かたがたそれは、述べたところの石庵書簡が元祿十五年のものと考へたくなる理由でもある。

青流——青流（後の祇空）が元祿七年ごろに堺に居を移したことは『住吉物語』^⑨等から明らかである。しかし、『花見車』（元祿十五年）には青流を堺の部に出しながら「新まち・高須のかけもち也」と言っていることから、堺・住吉を往來していたことが察せられる。事實、『網代笠』（元祿十一年刊、露泉撰）には「住吉」と肩書して入集し、「住よしの神おくりに詣で青流が館に宿す」と前書した才磨の句もあり、『龜島眺望集』の跋には「住吉隱士」と記す。『鏡之間』の俳筵では石庵と同座しており、元祿十五年春、青流が東下する時、石庵は、餞別の句を贈っている（『野がらす』）。石庵が來坂するや、間もなく青流は東へ去り、その交りはわずかの間であった。青流は、石庵と逢う以前に吟墨（『住吉物語』・露泉・細石・源五（『網代笠』）の讃岐俳人とも風交を持っていた。

來山——石庵が來山の句に評を付し『續今宮草』を編んだ宇狐がそれらを集の頭註としたことはよく知られている。「泉石といふ人へ交遊のちなみ有りて、翁の句を拾ひ、拔萃せしものあり」とも『續今宮草』は記す（凡例）。『俳諧古選』所收の句に「近復得^ニ澁翁^ガ之^數十篇^ヲ摘^レ之^ヲ」と前書するの、そのことについて述べたものであろうが、來山との交際を知る資料は少ない。おそらく、享保九年三月の大火で石庵が平野に難を避けた折にでも因みが出たのであろうか。

以上を通じて導き出されることは次のごときものである。①石庵は讃岐移住後にその句が諸書に散見されはじめるのであり、②『花の市』は別として殆ど元祿末年に限って作句活動が（諸書への入集を通じて）見られ、③（來山を別とすれば）その風交は、寸木及び寸木と縁のある堺・大坂の俳人に限られていたのである。石庵の句を収める撰集は、『茶草子』を除いて、いずれも堺・大坂あるいは寸木のものである。『野がらす』の撰者菘石も、同集による

と江州の人で、本集上梓の時はすでに故郷に歸っていたが、「としごろ難波江に」住み、「ひとくせてんわうじちかきほとりにすまぬし」た、(序を舎羅が誌すところから見れば)舎羅系の俳人で、上梓の「元祿十五年初秋」(奥)近くまで大坂にあったようである。寶永年間の撰集で石庵の句の入る『菊の塵』も、園女が在坂中から集を編むことをこころがけて集句していたと察せられるもので、元祿年間の句としてよい。また、石庵が交りを持った俳人の殆どが才麿系と目されることも注目してよいことだろう。寸木も、『金毘羅會』で才麿に序を求め、『花の市』の巻頭も才麿の句で飾っている。才麿は元祿六年春、金毘羅に滞在した(佐郎山)が、當然寸木との交りも出来たことであろう。あるいは、この才麿の引杖も、寸木を頼ったものかもしれない。ともあれ、惟中が俳諧から遠ざかってのち、惟中系の俳人の多くが才麿の傘下に吸収されていくと思われるのであるが、寸木の場合にも、その事實の一つを見ることが出来るだろう。

そしてさらに、石庵の大坂・堺における風交は、寸木の縁によるものであり、石庵は寸木によって俳諧を始めたのではないかと考えられるのである。石庵の讃岐移住前の句作については何ら知られるところがないのに對し、讃岐移住後に彼の句が散見されはじめ、しかも、それが前述のように、殆んど寸木あるいは寸木に縁のある俳書に限られるからである。「金毘羅在任十四年間は、寸木を來訪する俳人も交つて、花鳥風詠の俳諧生活をも營んで居た」とする大西一外氏の記述(『三宅石庵に就いて』)の一部は誤りとしても、「寸木の感化によつて、才子肌の石庵は傍ら俳句にも趣味を有つやうになり」という部分は認められねばなるまい。しかし、彼が、俳諧でもって身を立っていたとか、立てようとしたということとはなかつたに違いない。一體、彼は句作に對しては餘り熱心でなく、交際の上から、當然入集してよかりそうな讃岐や大坂の俳書に、彼の名が見えぬことはしばしばであった。「もとは俳かい士じやげな」と、石庵について述べる秋成の言(『膽大小心録』)は、當然、肯じられず、「泉石は何がしの鴻儒、俳句をも玩ばれて此戯れ(來山ノ句ニ評シタコト)有しとぞ」という『續今宮草』が最も眞に近い。寶永年間の入集は『菊の塵』以外

は知られず、正徳に入っても『鏞鏡』に一句しか入らぬ彼であるが、『花の市』に十句の入集を見る。だが、これが、寸木の撰であり、兩者の深い關係を知れば、異とするに足らぬであらう。石庵は、讃岐滞在中に寸木の仲介で妻帯したといい、『續近世畸人傳』の傳えるところによれば妻は岡田氏という。『花の市』に石庵は跋文を寄せる。同書は未翻刻なのでついでに紹介しておこう。(「は行替。濁點・句讀點は櫻井」)

花はうらねど花の市とハ、彌生に「たてば也。花の市」集は「市とおなじ名。名もおもしろし。」めされよ。句もおかし。めされよ。」風流の物賣、その牙儔は泉石。

前述のごとく、多分元祿十四年に石庵は大坂に杖を留めた。「遊子泉石」が、何故大坂を生涯の地としたかは審かにしないが、何らかの形で寸木の關係するところがあつただろうとすることは想像される。讃岐と堺・平野の文化圏の交渉、就中、廻船問屋を中心としたそれを調べる必要があるが、今はそこまで及ばなかつた。

『俳諧古撰』(寶曆十三年)は、「追加」として石庵と來山の句を別扱で掲げる。撰者三宅嘯山の妻は、蕉門俳人木節の曾孫であるが、嘯山は石庵の同族であるところから、かくのごとくしたものであらう。石庵の出た三宅家についても殆ど判明しない。石庵は、息春樓の生計のことを心配して「返魂丹」という藥を賣り出した。これは、當時、世人の悪口の所以となるのであるが、これを賣りさばいたのは金毘羅の木村家であつた。木村家は、家運が衰えて酒造業をやめてからしばらく「羽屋の返魂丹」を賣っていたという(松原秀明氏御教示)。平野の含翠堂は土橋友直が中心となつて、元祿十六年ころから自宅で講習會を開いたのに始まる。享保二年に講舎を持ち、老松堂と稱したが、後、石庵が含翠堂の名を贈つたという。ところで、この土橋家を繼いだ友直は、泉州の三宅家から養子に入つた人であり、實家の姓は石庵と同じことになる。また、土橋家は、慶長十九年以來合藥商を営んでいたという。最近、竹下喜久男氏は、「含翠堂設立の前提——平野七名家の動向を中心として」(『大谷女子短期大學紀要』12)で、含翠堂が「平野卿における支配層として七名家の同族意識の強化をはかり、傳統的權威を維持しようとする一連の動きの中で

企てられたものであ」ることを、詳しく論述された。そのような含翠堂に初期講師の一人として弟觀瀾と共に招かれたことや、設立の中心となった友直と同姓であること、あるいは土橋家も石庵も藥種商に關係するところがあつたことなどから、何か新しい考察の加えられる餘地もあるかと思うが、管見の範圍の資料では付け加えることは何もできなかった。これも後考を俟つ所以である。

石庵の俳風について知る手がかりは、『續今宮草』の頭註だが、専門の俳人ではないので、そのような作業をすることも、さしたる意味はないであろう。しかし、石庵の句を一見して、感じられることは、同音のくりかえし等によるリズムカルな點であろう。それは、文章にも言えることであつたと思う。

註

- ① 拙稿「諷竹と地方俳壇」(『密教文化』75)。
- ② 拙稿「祇空と淡々」(『國語國文』昭45・11)。
- ③ 「享保」九年、譜請落成。……同年冬讃州木村氏存立にて、東北隅に貳間に六間の長屋建立有之、木村氏上阪の節逗留の場所、並に遠方諸生寄宿之學寮と相定まる」と『懷德堂内事記』(『懷德』12による)にある。懷德堂の出資者に名を列ねる木村平十郎(俳號步才)と平藏(蠅虎)は寸木の子である。
- ④ 松原秀明氏の御教示による。大谷篤藏氏が昭和四十五年一月十八日の大阪俳文學研究會例會で紹介された。
- ⑤ 拙稿「東下までの青流」(『高野山國語國文』創刊號—未刊)。
- ⑥ 永野仁氏は『資料と考証』6に大内初夫氏が翻刻された『鏡之間』の解説で魯雜と呂圭についてふれておられるが、同一人物であるかどうかということには言及されなかつた。しかし、あるいは同一人物ではないかという疑いは早くから持つておられ、私にも洩らされていた。もし、他の資料等から同一人物であることが明らかになれば、その功は永野氏に歸せられ、否定されることになれば私の責任に歸せられるべきである。付記しておく。
- ⑦ 拙稿「祇空覺書」(『連歌俳諧研究』31)。「東下までの青流」。
- ⑧ 和田茂樹氏は「四國俳諧史」(明治書院版『俳句講座』10)で、「才膺は金毘羅の寸木を訪ね」て來讀したとされる。

〔補記〕 讃岐興昌寺に藏する『一夜菴筆海』の中に

御句はあれとも春日みかし一夜菴 若水寸木

俳人泉石としての三宅石庵

の短冊を認めうる。同寺に同じく藏する宗因自筆本『一夜庵建立縁起』巻末の獻句の中にはこの句は見出せず（惟中自筆本及び板本には獻句はない）、兩建立縁起の書かれた延寶九年の時點で惟中（あるいは宗因）と寸木を結びつける資料は何もない。しかし、惟中は、翌天和二年九月二十五日に金毘羅に入り、寸木の許に宿している（白水郎子紀行）。しかも、寸木の住する金毘羅と興昌寺のある觀音寺は同じ讚州に屬する。そう見れば、この短冊もまた木村寸木のものと考えられやすいが、筆蹟は相當に違ふように思われる。尤も、私の知る寸木の他の筆蹟は元祿末ごろ以後のものであるようなので、二十年ちかくの間に、手が變化したということも考えられよう。だが、寸木が「若水子」と號した資料も他にないし、この短冊帖が、あとから多くの人のものを貼付していったものであると察せられることや、寸木短冊の貼付されてある場所が惟中と無縁の人たちの間であることを考えあわせて、まず當面の寸木とは別人であろうかとしておくことにする。

翻つて、當面の寸木と同時代の元祿俳人に少なくとも二人の寸木が居たと察せられる。一人は、美濃三侯の寸木で、貞享五年六月十七日、岐阜滞在の芭蕉を訪ね、名古屋の荷兮や越人と俳筵に一座した人物であり、もう一人は、『あしそろへ』（元祿五年跋）に「勢州謔言寸木」として載る人物である。『後の旅』（元祿八年）に「亡人」として收る寸木は前者であろう。さして重要な問題ではないが、寸木については『俳諧大辭典』にも『俳諧人名辭典』にも説明が加えられていない今なので補記しておく。

泉石句集

茶草子（元祿十二年きさらぎ校考、白雪撰）

松の木にあふなき雉子の歩かな

泉石

袖で鼻かむなと母のはな衣

泉石

金毘羅會（元祿十三年九月才麿序、寸木撰）

川水ハさうて流るゝ枯野かな

コンヒラ

泉石

雪に見よをれた所か竹の直

泉石

踏石はふまれて年かくれにけり

泉石

一日舎羅をいさなひて興泉寺の蓮池にあそぶ

蓮いけやはたに雀の糞ひとつ

泉石

涼風のいきて居る也森の下

泉石

宮嶋の彌山にのほりて

雲のミネ裾にわかるゝ伊豫周防

泉石

※漢文ノ序ヲ寄セル

※「臨井庵即興」トシテ、「ひくらしや非時米あらふ谷の水 寸木」ヲ立句ニ、以下、林鹿・步才・汀龜・如風・泉石（イズレ

モ本集に金毘羅住ノ旨記ス）デ歌仙一卷

追鳥狩（元祿十四年、露堂・舎羅撰）

※「讚州金毘羅」トシテ、「水の際雲にもおるや郭公 寸木」ヲ立句ニ、以下、舎羅・泉石・林鹿・步才・汀龜・如風・吐計デ

歌仙一卷

俳諧鏡之間（元祿十五年、魯雞撰）

梅と出た神のかたきもおほからず

大坂 泉石

狼の木魂も寒し谷の庵

泉石

※「即席」トシテ「松梅の因^よみや花の二句ひ 岸紫」ヲ立句ニ、以下、魯雞・正村・寸志・素丸・郷磨・喬古・知新・悠川・菊

俳人泉石としての三宅石庵

芳・雷水・泉石・青流・湖舟ノ百韻一巡

※「追加百韻」トシテ「松ノ」といふてめてたり去年も此「渭川」ヲ立句ニ、魯雞・惟然・水殘・悠川・嘉角・青流・菊芳・
三惟・通亮・守株・歌雪・風也・素丸・舍羅、サラニ途中カラ泉石・知新ガ付ケタ百韻一卷

野がらす（元祿十五年初秋與、萩石撰）

青流子の東行するに

まめしげや宇都のやま今花の山 泉石

菊の塵（寶永四年成カ、園女撰）

水仙の黄なは誰から雪白し 泉石

花の市（正徳二年自序、寸木撰）

山は人に川も酔けり花の市 泉石

雨にぬれうくひすか鼻をとをる

春道のつらきハ合羽すかた哉 泉石

さゝの葉にあるか風ミる暑かな 泉石

旅人をかくまふて

涼風や幸橋をもとりはし 泉石

野あるきやにほひもへきの花晩稻 泉石

秋のくれ我ちからくさけふり草 泉石

柚は歳のこにくうてよし秋の園 泉石

寒菊と白を見合す不破の關 泉石

乞食の寝るをみて

寝れはねるあのこも一重霜一重

泉石

水よりも寒しもとりの空一荷

泉石

※跋ヲ寄セル

鑄鏡（正徳三年九月與、舍羅撰）

から人にあるか問ふそ蚤の蚊張

泉石

石庵書簡（某年壬八月二十二日付）

呂圭とたつねて舍羅にかたる

三人に枕二つや秋の風

（註）「壁にも草の見ゆる名月 手前發句舍羅脇にて御座候」トツツク

名月

宇治迄の足を木幡の月見哉

襄陽帖（眞蹟模刻）

花鳥のうしろすかたや淡路島

泉石

遅吹の己は寒き木わた哉

泉石

さへつたら時雨しそいなミねの雲

眞男子ありや裏屋の紙幟

観よ雪におれた處か竹のすく

泉石

眞蹟短冊（柿衛文庫藏）

其方の御手ハとゞへは松の風とは西山宗因か」つけあひ也とりて中秋の發句とす

俳人泉石としての三宅石庵

名月に御句ハとゞへは奈の風

(註) 本短冊ハ署名ノ部分ガ缺ケテイルガ、字體及ビ短冊ノ料紙ガ本短冊帖所收ノ他ノ泉石短冊ニ葉ト同ジデアル故ニ泉石句ト
斷定ス

金賣や落花の鞭の小驚き

泉石

花鳥の後姿やあへちしま

泉石

眞蹟短冊 (早稻田大學圖書館藏)

をのつから瀧のやせけり冬木立

泉石

萬年先生遺墨帖 (懷徳堂文庫舊藏、大阪大學藏)

水無月の水に臨ミテ

年もハや半流れぬ御祓川

白牡丹をみて

中／＼に白きや花のふかみ草

正名

俳諧古撰 (寶曆十三年正月刊、嘯山撰) ……俳諧叢書ニヨル

近復得^{ホト}二^ニ滄翁^カ之數^ヲ十篇^ヲ摘^ム之^ヲ。要^{スルニ}是^レ皆^ク崑岡^ノ中之物

つい聞けはきたなし庭は梅たらけ

大阪 泉石

酒か曰

飯蛸の飯と語らん身のむかし

着は雨其着迄のあつき哉

眞白に眞四角なり藏の月

三人に枕二つや秋の暮

曉に乞食を見て

寐れば寐るあの薦一重霜一重

奢られて又わびらるゝ紙衣哉

續俳家奇人談（天保三年七月刊、玄々一著）……俳諧文庫ニヨル

つきげばきたなし庭は梅だらけ

眞白に眞四角なり藏の月

奢られて又わびらるゝ紙子哉

曉に乞食を見て

ねればね⁽³⁾そのこもひとへ霜ひとへ

酒がいふ

飯蛸のいひとかたらむ身のむかし

付 記

本稿は、昭和四十五年六月二十七日、奈良橿原會館で行なわれた日本近世文學會春季全國大會の席上、口頭で発表したものを基にしたが、その前日、木村寸木の後裔の方たちに、金刀比羅圖書館の松原秀明氏の御盡力でおあいすることができた。姓が石井と變わっておられたため、寸木の子孫については不明であったのだが、その分かったことは、誠に僥倖であった。石井ヒサノさんの御息女が嫁いでおられる西宮の鹽谷家で松原氏と共に木村家の系圖を見せていただき、後、伊丹の岡田利兵衛氏宅で懷徳堂堂友會の方たちも加わって、岡田氏藏の寸木短冊帖などを見せていただいた。木村家のことについては、調査にあたっておられる松原氏からいずれ報告があることと思うが、とりあえず右のことを記しておきたい。

なお、本稿をなすにあたり、多くの方たちにお世話になった。大谷篤藏氏に有益な御示唆をいただいたのがそのきっかけであったし、松原氏と大谷女子短期大學の竹下喜久男氏からはいろいろ御教示にあずかったり貴重な藏書を借覽させていただいた。

藤塚誠二・山口正男氏はじめ掌友會の方たちにも御親切にいただいた。岡田利兵衛氏はいつもながら資料の公開を心よくお許し下さった。雲英末雄氏のお手もわずらわせた。末筆ながら録して感謝の氣持としたい。

(昭和四十五年七月十二日)